

# アソビ の チカラ

## 支援活動で学んだレクリエーションの意味。

東北福祉大学 地域共創推進室 まごのてくらぶ 推進委員相談役 石原尚生

『まごのてくらぶ』は住民の生活福祉の向上・地域の課題解決を図るためのお手伝いを行うサークルです。ちょっとしたお手伝いが欲しいとき、私たちが「まごのて」となって、お手伝いをしています。東日本大震災でも、まごのてくらぶは支援活動を精力的に行ってきました。支援活動は多岐に渡り、またニーズに合わせて変化してきました。その中で私が体験したレクリエーション支援についてご紹介させていただきます。

レクリエーション支援活動の第一歩は、震災の翌日3月12日、仙台市国見小学校でスタートしました。震災直後、仙台市内もライフラインが全てストップし、約1300人への支援活動として、炊き出しや深夜の体育館見回りなどの食事・生活支援、そして教育支援として子どもたちへのレクリエーション活動を行いました。レクリエーションと災害支援活動についてのつながりは正直それまであまり考えたことがなかったのですが、その後の体験でレクリエーションと災害支援活動のつながりが理解できる出来事に出会いました。

4月下旬、女川町へレクリエーション支援に行った際、体育館である避難所のロビーでレクリエーション活動を実施しました。この活動は宮城県レクリエーション協会が行った支援活動に私たちも仲間と共に参加したのですが、そこに男の子の兄弟がやってきました。お兄ちゃんは小学校低学年、弟は幼稚園ぐらいでしょうか、常に寄り添って離れようとしません。高齢者の皆さんと簡単な体操など行っているときも弟は私の膝の上に乗る、お兄ちゃんは隣に座って一緒に体操をしています。兄弟はプログラム中ずうっと私と一緒に離れようとしません。そのとき、「子どもたちも普段甘えちゃいけない、我慢しないといけないと、ストレスがたまってしまっている、一緒に対等に遊ん

であげることが必要なんだ!」と感じると共に、災害支援活動の中でレクリエーションの必要性を理解することができました。

今回の震災では、子どもは計り知れないストレスを受けていました。学校に行けない、友だちとも会えない、遊ぶ場所も無い。そのような中で突然、周囲に対して撲つたり、叩いたりする暴力的な行為や“赤ちゃん返り”と言われる甘え行為など、情緒が不安定なサインが見られました。大切なことは、子どもたちのサインを受け止めてあげることです。先ほどの兄弟の体験だと、一緒に遊んで、一緒に楽しむ、ジャンケンゲームも勝ち負けをきちんとつけてあげる、話しかけられたら話をきちんと聞き、返答してあげることを求めているのだと思いました。それからは、子どもたちに対する自分の役割が明確になったので、真剣に遊び、楽しみ、話をきちんと聞くことを心がけるようになりました。

また、被災地では、子どもたちだけではなく、高齢者の方々への支援やボランティアのためのボランティア等の支援活動と様々な現場を経験させていただきました。高齢者の方々もやはり知らず知らずのうちにいろいろなことを我慢しています。そんなときにレクリエーションで体を動かし、他の人たちとふれあうことで笑顔になれ、健康づくりや気持ちを和やかにすることに大いに効果的であるということを体験できました。簡単なことですが、声をかけること、あいさつを交わすこと、「こんにちは!」「一緒にやりませんか?」とお誘いすることも大切なことであるということを改めて感じました。こちらから心を開くと相手も開いてくれる、その一声で、じゃあやってみようかという気持ちになってくるのがとても嬉しかったです。

今回の体験を通して、様々なことを学び体験させてもらいました。これからも、現場で得た経験を活かしレクリエーションを通して、災害支援活動を行えたらと思っています。



女川町でのレクリエーションボランティアの一コマ。男の子を抱えているのが石原さん。



震災直後(3/19)の石巻市の様子。石原さんは東北福祉大学の先生と共に、ヒッチハイクで石巻市まで安否確認と実地調査に行ったそうです。